

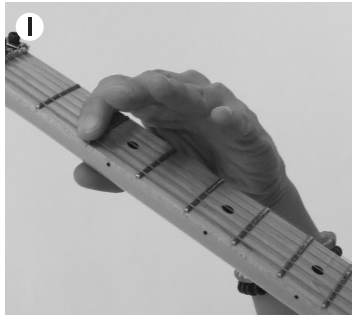
注意点1



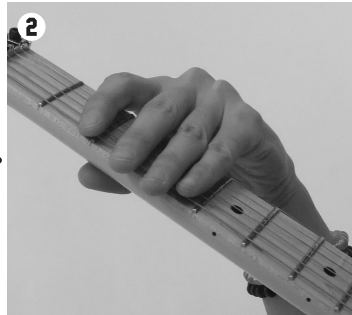
左手

4本指をすべて使って音を確実に止めるべし!

現代的なラウド・ロックでは、このメイン・フレーズのように16ビートのノリを取り入れたリフがよく登場する。このようなフレーズでは、休符で音をキッチリ止めること【註】が重要で、その休符による“間”がシャッフル系のハネたリズムとはタイプの異なる独特のグルーヴ感を生み出すのだ。ラウド系ではディストーション・サウンドによるブレイが基本になるので、音を止める時には、左手の4本指をすべて使った方がよい(写真①&②)。ただし、ミュート時に力を入れ過ぎてしまうと、自然にハンマリングしてしまいノイズが発生するので注意しよう。各自でミュートの力加減をいろいろ研究してもらいたい。



音をしっかりと止めるため、3本指をミュート体勢にしておこう。左指が指板から離れ過ぎないように注意!



休符時の左手によるミュート。力加減に気をつけながら、4本指で弦の振動を抑えよう。

注意点2



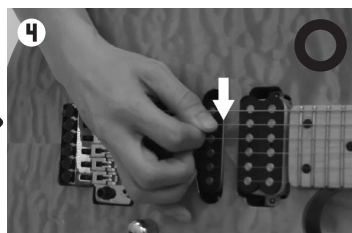
右手

大きい振りはNG! 単音リフでの空振り

左手のミュートに続いて、ここでは右手の空振りについて解説しよう。このメイン・フレーズは最後まで16分音符を土台にしたオルタネイトで弾き続けるのだが、1〜3小節目の単音リフでは休符時に右手の小さな空振りを入れることがポイントになる(写真③&④)。ここで、右手の振りが大きくなると、ブリッジ・ミュートが外れてしまうので気をつけよう(写真⑤&⑥)。逆に、ブリッジ・ミュートをキープしたいからと言って、空振りを入れないとリズムに乗れないので注意すること。ブリッジに触れている右手側面部分を支点にして上下に手を動かすと、ブリッジ・ミュートのポジションをキープしたまま、小さな空振りを行なうことができるだろう。



6弦での空振り時。ブリッジ・ミュートを掛けながら……



小さな空振りを入れる。16分のノリを感じながら弾こう。



6弦にブリッジ・ミュートを掛けていても……



右手の振りが大きいとミュートがハズれるので注意!

~コラム4~

教官の戯れ言

ここでは、著者のお気に入りのモダン・ラウド系バンドを2つ紹介しよう。1つ目のディスターブドは、このメイン・フレーズのように16分音符を活用したヘヴィ・リフが印象的なバンドだ。変則的なリズムを取り入れることもあって、楽曲内容も多彩な印象がある。2つ目のマッドヴェインもディスターブドと同じく、ヘヴィ・リフと変則的なリズムが持ち味のバンドだ。特に初期の音源では、変拍子を活用したまさに唯一無二のサウンドを聴かせている。この2つのバンドはリフを歯切れ良く聴かせるために、意外とゲインを少なくして、ピッキングの力加減で歪みを調整しているようだ。

著者・小林信一、かく語りき
ディスターブド&マッドヴェイン編ディスターブド
『インデストラクティブル』

2008年にリリースされた4枚目。緻密に構築された楽曲、パワフルなサウンドなど、彼らの実力の高さを見事に証明した1枚。

マッドヴェイン
『L.D.50』

ラウド・ロック・シーンに大きな衝撃を与えたデビュー作。変拍子を取り入れ、圧倒的なテクニックで攻め立てる強力作だ。

【休符で音をキッチリ止めること】休符では音を確実に止めることがマストで、ブラッシング音が鳴ってしまうと雰囲気が変わってしまう。弦の振動をキッチリ止めよう。